

Title	構造的文体論への予備的考察
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外国語大学学報. 19 p.9-p.26
Issue Date	1968-06-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80309
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

構造的文体論への予備的考察

舟 阪 晃

Preliminaries to Structural Stylistics

Akira Funasaka

Aims: (1) to discuss stylistics as a part of sciences of behavior, and
(2) to discover something constant in the messages encoded by one and the same person.

Outline: 1. Aims

2. Structural Stylistics

2.1 Patterns of Human Behavior

2.2 *langue* and *parole*

2.3 Definition of Style

3. Individual Style

4. Limit of this Study

1. 目 的

小論の目的は、次の三点について考察してみることである。

- (1) パターンの人間行動の一つとしての文体
- (2) 変形理論を導入した言語学をふまえた文体論
- (3) 個人文体にあらわれる恒常体

2. 構造的文体論

2.1 人間行動のパターン

人間をとりまく環境は一見複雑で無秩序な現象にみちあふれている。しかし、人間にはこの無秩序な現象をたんに無秩序な現象と認知せず、その現象の中になんらかの秩序を発見しようとする能力がある。このおどろくべき能力は、程度の差こそあれ、すべての人間に備わったものであり、人間以外の動物にはないであろうと思われるような性質のものである。たとえば、碁盤上に

白と黒の碁石がおいてあれば、たとえ石のおき方の規則を知っていなくとも、石の分布をまったくばらばらに認知することはなく、むしろ、白の分布、黒の分布という認知のしかたをするであろう。また、白と黒の碁石のほかに赤と緑の碁石があれば認知される分布様式はさらに複雑なものとなる。われわれが未知の言語を習得する場合にも同じようなことがいえる。最初は未知の言語は単に物理的な空気振動であるにすぎないが、観察を深めるにつれて、一見無秩序な空気振動の中に同じに聞える部分とちがって聞える部分とを発見する。そして、その空気振動はいくつかの断片に切られ、それぞれの断片がもつ特徴によりグループ化され、全体の構造の一部を形成する。言語の場合は碁石の分布とは比較にならない程複雑であるが、原理的には同じことであろう。このようにして無秩序の中に発見された秩序を「パターン」とよぶことにすると、人間はパターンの認識をする能力をもっているといえる。

パターンの認識の能力と同じぐらい重要なことは、人間の行動自体にパターンの的に解釈される部分が多いということである。道を歩いていても、本を読んでいる、眠っている、われわれの行動は何らかのパターンを示している。逆に、われわれにとって、まったく無秩序な——パターンのない——行動をするというのは非常に困難であるといえる。本人は無秩序な行動をしているつもりでも第三者からみれば何らかのパターンが認知できるであろう。精神異常者は無秩序な行動をしているように思われるかもしれないが、事実は、正常な人間とはちがった行動パターンを示しているにすぎない。このようなパターンの行動は、本人の意識によってではなく、ほとんどの場合、無意識の世界によって制御されている。だからこそ、一定のパターンが維持されるのだともいえる。たとえば、教室の中でどの学生がどの席につくかは一定のパターンを示していることが多い。新学期がはじまってしばらくは変動があるが、やがてはかなり安定した分布パターンを示してくる。毎週まったく別の席につく学生がいたら彼はよほどの変人であろう。このような行動はほとんど無意識的におこなわれるもので、意識させられるやいなや、いぜんのパターンは大きく変動する。また、人間の行動は、とくに無意識的なときは、外的条件の変化によって影響をうけ、一見非常に複雑な様相を呈することが多い。たとえば、学生の教室での分布は、夏には陽のあたらない方へ移動し、冬には陽のあたる場所や暖房器の近くへ移動する。また、教室が学生数に比較して狭い場合には、一人の学生の気まぐれが多くて多くの学生の分布に影響を与えることになる。このように、人間行動のパターンを追求するときには外的条件の干渉に注意せねばならない。この点を軽視すると、パターンが発見できなくなったり、まちがったパターンを認知することになる。

言語の使用も無意識的パターン行動の一つである。われわれが母国語で情報交換している場合、われわれの意識は情報の内容に集中され、情報の手段は、特別の場合を除き、無視されている。情報の内容は思いだせても表現形式は忘れられてしまうというのもこのためである。また、言語学的訓練を受けていない人に母国語で文法的でない文を作るように頼めば彼は答に窮するにちがいない。しかし、言語組織を意識しないということは彼の頭の中にそのような組織がないということではない。そのことは、彼に文法的でない文を聞かせれば、その異常さを敏感に感じと

ることができる、ということで証明される。

2.2 言語について

人間のパターンの行動の一部は言語をとおしておこなわれる。Saussure 以来、言語活動 (langage) は言語 (langue) と言 (parole) とに二大区分され、この区別は Morris^① の syntactics と pragmatics との対立や Chomsky^② の competence と performance との対立の裏に生きつづけている。Saussure は言語学の目標は対立する項目の体系としての langue の研究と考え、parole の研究は当面の目標にはおかなかった。これは、parole は langue に依存しているという考え方によるもので、当然のことであろう。Chomsky の場合もまず competence の研究をおこない、次の段階として performance の方へ移行しようとしているようである。langue というのは langage の場から人間を取り去ったときに考えられるもので、簡単にいえば、特定言語のすべての対立項目の体系といえよう。一方、parole は langue が個々の言語使用者によって実現されたもので、時、場所、その他の外的条件により影響をうけるものである。parole の変動は種々雑多であるが、langue がそれに限界を与えている。つまり、langue に反しない限り parole は自由であるといえる。たとえば、日本語の「わ」、「れ」、「ね」という文字は langue 内においてお互いに対立する位置をしめている。「わ」は「れ」や「ね」でないところに存在理由があり、他の二字についても同じことがいえる。一方、parole 面においては、「わ」は「れ」や「ね」との対立を解消しない限り、いろいろの書き方が認められる。しかし、もし「わ」が「れ」や「ね」と区別できないように書いてあれば langue からの逸脱となり、情報伝達はできなくなる。つぎに parole について注意しなければならないのは、langue は特定言語の対立体系をすべて含んでいることになっているが、現実には言語を使用するときには langue のすべてを用いることはできないということである。ある条件下に一つの表現形式を選択すれば、その他の可能な表現形式のすべては捨てなければならない。たとえば、*My father has died*, という形式を選択すれば、*My beloved parent has joined the heavenly choir*, *My dear father has passed away*, *My old man has kicked the bucket*,^③ などはすべて捨てたことになる。われわれが現実には発話をするときには langue の中を調べて、たった一つの表現形式を、ほとんど無意識的に、選択している。偉大な作家といえども、langue の規制を無視することはできずに、langue という「掌」の上を右往左往しているにすぎない。

われわれは langue という語を不明確に用いてきたが、これには二つの見方があると思う。一つは Voegelin^④ の用語で統合文法 (unified grammar) とよばれるもので、langue の中にはあらゆる言語的対立体系が含まれると考える。この考え方にしたがえば、統合文法の中には、casual

① Morris, Charles W., *Foundations*.

② Chomsky, Noam, *Aspects*.

③ Warner, Alan, *A Short Guide*, p.1.

④ Voegelin, C.F., "Casual and Noncasual Utterances within Unified Structure" *Style in Language*, 57-68.

文法や noncasual 文法や詩の文法など、すべての文法が含まれることになる。一方, langue を狭い意味の対立体系 (norm) とみなし, その体系に入っていない言語現象は langue からの逸脱 (deviation) であるとする立場⁽¹⁾もある。たとえば, noncasual な発話をカバーするような文法を norm として設定すれば, casual な発話は norm からの逸脱として記述される。casual 文法を norm にすれば noncasual が逸脱ということになる。Chomsky も同様の考え方のように, 文法的な規則からの逸脱が文学的効果をうむ⁽²⁾という趣旨の発言がある。しかし, このような考え方にたつと, どの文法を norm にするかによって全体の記述が変動をうけることになり, つねに, “All grammars leak”⁽³⁾ という不安がつきまとう。そこで筆者は, 前者の立場をとり, 統合文法の中に casual 文法, 詩の文法, 文語の文法などが含まれるものとする。このように考えると, 「文法的でないが故に文学的な効果をうみだす文」というのはありえず, その言語の使用者に理解されるかぎりその文は文法的である。いいかえれば, 文法的である文しか文学的効果は生じえないことになる。

2.3 文体について

2.3.1 文体研究の前提

われわれは文章——文の集合——を読むことにより, 何らかの印象をつかむことができる。そして, いくつもの文章を読みくらべることにより, それぞれの印象に類似点・相違点を認知する。さらに, ときには, その文章の筆者が誰であるかをいいあてることもできる。たとえば, Hemingway の二つ以上の作品を読めば, その作品からかなり安定した印象を与えられ, 作者の不明の文章を与えられてもそれが Hemingway のものであるかないかを判定できることが多い。これは, Hemingway の作品のどれをとり上げてみても, 一つ一つの作品の中に Hemingway を感じさせるような恒常的な何かがあることを示している。つぎに, Hemingway と Faulkner とを読みくらべてみれば, それぞれちがった印象を与えられるであろうが, このことは, 両者の間に共通でない恒常体があるためと思われる。また, Hemingway と Faulkner と *The New York Times* の社説とを比較してみれば, 前二者にも共通点があることに気がつくであろう。

このように文章を比較することにより, いろいろの印象を受けるのであるが, 印象というのは主観的なもので本来つかまえておけないものである。そこでわれわれは, 印象の原因を客観的に記述することはできないものか, と考えることになる。そしてできれば, 数量的な記述をしようと試みる。

前 提

(1) すべての表現パターンのちがいは, すくなくとも頭で理解, 認知できる限り, 記述できる。

① Osgood, Charles E., “Some Effects of Motivation on Style of Encoding”, *Style in Language*, 293—306. Enkvist, Nils E., “On Defining Style” *Linguistics and Style*, 40.

② Chomsky, N. & Miller, G.A., “Introduction” *Handbook*, 291.

③ Voegelin, C.F., *Ibid.*, 65.

(2) 同一の表現形式は、他の条件が同じならば、同一の印象を与える。

印象を客観的に記述するといったときには、客観的な記述の方が印象記述よりもより深く文体的事実を解明できるはずだという予想にたっているのであって、たんに印象を数字におきかえるのが目的ではない。Osgood⁽¹⁾の研究に、自殺者の遺書とにせの遺書との文体的比較をしたものがあるが、彼はそれらの特徴を客観的に記述することにより、印象的には区別できない両者を fool-proof な手続きで区別しようとしている。

2.3.2 文体の定義

われわれは文体を言語表現形式の選択パターンと定義する。そして、その選択パターンの内部構造を明らかにするのが文体論であるとする。選択パターンの研究をするためにはまず *langue* なり *competence* なりがある程度記述されていなければならない。つまり、Saussure の *parole*, Chomsky の *performance* はそれぞれ *langue* と *competence* に依存しているからである。そして、当然、文体の研究がどういう方法をとるかは、言語体系がどういうふうに記述されるかにより左右される。しかし、どのような言語観をとるにしても、言語体系の記述、つまり言語学は言語の表現可能性をすべて含んでいなければならない。一方、文体研究では、言語使用者が許された表現可能性のどれを選択したかに注目し、その選択のパターンを記述しようとするのである。このように定義した文体は記述概念であり、価値概念ではない。したがって、「彼の文章には文体がない」とか、「Aの文体よりBの文体の方が『よい』」とかいう表現は不可能である。⁽²⁾

文体を価値概念とみなし⁽³⁾、「文体を発生させるものが文学であるとする立場」⁽⁴⁾にたてば、次の発言が可能となる。

(1) 「文は人なりと言っても、逆に人のあるところ、必ず文体があるとは限らない。文体は言語がなければ存在し得ないが、言語の存在するところ、必ず文体が存在するわけではない。」⁽⁵⁾

(2) 「ただ自己の思想感情がのべられた、というだけでは『スタイル』にはならない。」⁽⁶⁾

(3) 「人間は生まれつき、一定の性質をあたえられている。が、その反面、一定の性質を欠いていることになる。この性質面のうち、長所をのばしていけば、それがスタイルの核になるに相違ない。」⁽⁷⁾

以上のような文体論も文体論の一つであるが、筆者の文体論は人間の行動パターンの研究の一部分をしめるもので、たんに文学を理解するための文体論や文学研究としての文体論を考えているわけではない。

次に、選択パターンとしての文体がどのように決定されるかを考えてみよう。まず、個人があ

① Osgood, Charles E., *Ibid.*, 293—306.

② cf. Enkvist, N.E., *Ibid.*, 32. Guiraud, *La Linguistique*, 107.

③ 波多野完治「文章心理学<新稿>」, 62.

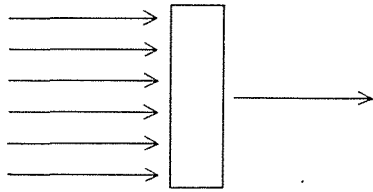
④ 東田千秋「文体論—英国近代作家の文体」, 22.

⑤ *Loc. cit.*

⑥ 波多野完治, *Ibid.*, 44.

⑦ *Ibid.*, 51.

る特定の選択をする場合には左図のようになろう。白い箱は個人の中にあると考えられる「選択

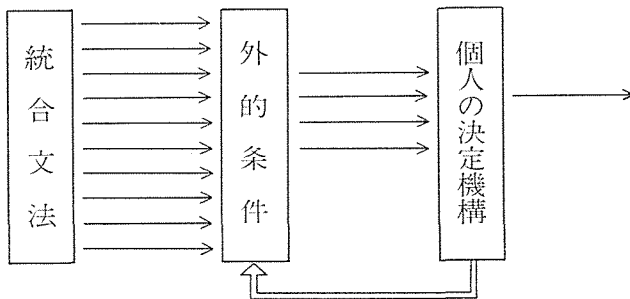


個人による文体決定

決定機構」でそれに対する入力、その個人が使用する言語が許容するすべての表現形式である。そして、その出力は個人によって選択されたパターン、つまり個人文体である。この図に関するかぎり、どのような出力を選択するかは個人の「選択決定機構」に依存している。

しかし、上図では表現形式を選択する個人はまったく環境のない真空地帯にすることになる。

が、現実には言語使用者は複雑な条件下におかれているのであるから、上図は左図のように改良



されねばならない。統合文法の出力は上図の入力と同じく、特定言語の許容する表現形式のすべてである。この形式群は個人による選択をうけるまえに外的条件により選択をうけているので、個人の選択の自由は前図におけるそれよりも小さくなっている。

「個人の決定機構」から「外的条件」にいたる二重矢印は、言語使用者が意識的に、外的条件により選択されたパターン——つまり、「個人の決定機構」への入力——に変更を加える場合を示している。この図における「外的条件」というのは言語使用者の環境のすべてであり、つぎのような項目からなっている。(1)時、(2)場所、(3)職業や地位など、(4)性別、(5)教養、(6)伝達手段、(7)伝達様式、(8)言語使用者の相手とその外的条件、など。これらの項目はいつでもすべてがそろっているわけではないが、かなりの項目が複雑にからみあい、表現形式の選択に限定を加えている。

このように考えてくると、上図において、二段階の選択が認められることになる。そこで、われわれは、「個人の決定機構」による選択パターンを「個人文体」(individual style)、「外的条件」による選択パターンを「集合文体」(mass style)とよぶことにする。「集合文体」というのはいかにも不体裁な用語であるが、ある一定の条件下におかれた個人の集りが共通に示すであろうようなパターンということである。

このように区別された「個人文体」と「集合文体」とはそれぞれ文体素 (styleme)⁽¹⁾ からなる

① *Style marker*, こばやしひでお, “言語美学としての文体論”「文体論入門」, 14.
Style morpheme, Hockett, C.F., *Course*, 279.

構造をもち、言語記述のレベル⁽¹⁾のおおのに独特の文体素構造があらわれる。文体素については二つの考え方がある。一つは、Hockett⁽²⁾のように、文体素は「普通の発話」ではなく、「普通の発話」に特別の効果を与えるときにあらわれるという考え方である。たとえば、*He's gonna find 'er.* vs. *He is going to find her.* / *John's going.* vs. *John is going.* においては、それぞれ後者の文の方に“style morpheme”があり、それは“deliberate and careful speech”を意味するという。もう一つの考え方は「普通の場合」で用いられる発話には unmarked⁽³⁾な文体素があり、「特別の場合」における発話には marked な文体素がある⁽⁴⁾とする。筆者は文体素はある種の構造を成するものという予想にたっているので後者の考え方に賛成したいと思う。したがって、「文体素がない」発話においては、「ゼロの文体素の構造がある」と解釈する。このような考え方にたった文体素は音素の示差的特徴 (distinctive features) に類似し、一つの文体素の示差的な (marked) 特徴が、ちがった条件下においては、余剰的な (redundant) 特徴になることもある。たとえば、Saporta⁽⁵⁾によれば、“ordinary context”では *He came too soon.* が、unmarked で、*He arrived prematurely* が marked であるが、母親が子供について話しをするような場合には、*He came too soon.* が marked で、*He arrived prematurely.* が unmarked であるという。

最後に、文体素というのは発話全体を拘束するものであることを指摘しておきたい。*be seeing you* と *be seein' ya* とはそれぞれ別の文体素の拘束をうけているので、両者を混同して *be seeing ya* とか *be seein' you* とかいうのは不都合である。⁽⁶⁾つまり、文体素は *be seeing you*, *be seein' ya* のそれぞれを全体的に拘束しているのである。そして、この拘束はここにあげた例のような短い発話から数巻からなる本までにおよぶこともある。

2.3.3 集合文体について

集合文体についての考察は小論の目的ではないが、一応かんたんに言及しておく。

3.3.3.1 Joos の五大文体⁽⁷⁾

- (1) frozen ———印刷用の文体で、話者・聴者の参加がないので発話は抑揚をともしない。
- (2) formal ———話者・聴者の相互参加がない。断片的な特徴としては、Latinism, 単語では *may*, *should* などがよくあらわれ、*maybe* よりは *perhaps* の方があらわれやすいという。
- (3) consultative ———聴者は連続的に存在する。特徴としては、聴者の側に *yes*, *oh*, *I see*, *that's right*, などの反応をひきおこす。
- (4) casual ———友人・知人間で用いられる文体。特徴は省略 (ellipsis),⁽⁸⁾ 俗語。単語では

① 音素論, 音素配列論, 形態素配列論など。

② Hockett, C.F., *Ibid.* 279.

③④ Saporta, Sol., et. al., “Linguistics and Content Analysis” *Trends*, 140.

⑤ *loc. cit.*

⑥ Harris, Z.S., *Structural*, 11., Hockett, *Ibid.*, 279.

⑦ Joos, M., *The Five Clocks*, 13—28. “The Isolation of Styles”, *Monograph Series* No.12, 109—110.

⑧ *Friend of mine saw it. Bought it yesterday. Leaving? Seen John lately?* etc., Joos, M., “The Isolation”, 111—112.

perhaps よりも *maybe* がこのまれるという。

(5) intimate ———ごく限られた集団の特殊な文体。

ここであげた五大文体は、筆者の「外的条件」の(8)「言語使用者の相手とその外的条件」に注目し、分類されたものである。ただし、*frozen* については(6)「伝達手段」も考慮されている。

2.3.3.2 Voegelin⁽¹⁾

Hopi 語においては、*casual* な文体はどのような条件下においても妥当であるが、*noncasual* な文体は、時、場所、話者によって限定されるという。筆者の条件でいえば、(1)時、(2)場所、(3)職業、地位、(4)性別、(5)教養などが関係するであろう。

2.3.3.3 Bloomfield⁽²⁾

文体を *normal* と *learned* にわけ、前者には、*He came too soon. / It's too bad. / if he comes*, 後者には、*He arrived prematurely. / It is regrettable. / in case he comes* などがあるという。この分類は(5)教養、(8)言語使用者の相手とその外的条件、などによるものであろう。また、語いに関しては、*legal terms* や *criminal terms* をあげているが、これらは(3)職業・地位に関係するであろう。

2.3.3.4 その他

一般によくおこなわれる *colloquial vs. literary* の区別は(6)伝達手段、(7)伝達様式のちがいであろう。また、*literary* の中での詩と散文との区別は(7)伝達様式のちがいによる。Jespersen⁽³⁾ や Bloomfield⁽⁴⁾ の “*women's language*” は(4)性別が関与する。

このように、外的条件の組み合わせとその変化に対応する表現形式上の特徴の記述は断片的にしか実現されていない。この問題は稿を改めてとりあげてみるつもりである。

3. 個人文体について

つぎに、対象を個人文体に限り、そのなかに何らかの「恒常体」があるかどうかを客観的に検討してみよう。言語を記述するときには、音素論、音素配列論、形態素論、形態素配列論、意味構造論、書記論などのレベルを区別するために、文体論では各々のレベルについて選択パターンを調査しなければならないが、この小論では、形態素配列論（の一部）だけをとりあげる。

3.1 資料

- (1) E. Hemingway ; *The Sun Also Rises* (Sun), *Across the River and into the Trees* (River),
Green Hills of Africa (Green).

① Voegelin, C.F., *Ibid.*, 58—62.

② Bloomfield, L., *Language*, 152—153.

③ Jespersen, O., *Language*, X III.

④ Bloomfield, L., *Ibid.*, 153.

(2) *The New York Times* の社説のうち政治⁽¹⁾を扱ったもの。

各資料より、3,000語の長さの部分を選び分析の対象とした。ただし、地の文と会話体の文とは外的条件がちがうので、後者は対象から除いた。また、*The New York Times* の社説は比較のための補助資料である。

3.2 分析方法

文体研究の方法は言語体系をどのように記述するかによって左右される。生成変形文法は、いまだ安定した状態にはないが、文体論の研究にも新しい見方を展開することになろう⁽²⁾。しかし、私見によれば、生成変形文法はあまりにも「ルール中心的」で、筆者の文体論には組みにくい点が多い。というのは、筆者の文体論は「構造中心的」、「パターン中心的」であるからである。本来、ルール中心的な考え方とパターン中心的な考え方とは対立する発想法であると思う。

筆者は、(1)基本的抽象構造群とその下位分類、と(2)変形操作⁽³⁾とにより、与えられた複雑な文構造を説明し、文章の構成を研究しようとする。いいかえれば、与えられた文が、どのような基本的抽象構造群と変形操作とによって作られたものであるかに注目するのである。

つぎに、筆者が考える基本的抽象構造群とその下位分類の一部を示しておく。⁽⁴⁾ 英語のすべての文をカバーする抽象的記号をSとするなら

$S > NP + VP \text{ (Modifier) (C} \cdot \text{S)}$ ⁽⁵⁾

NP+VP は五つのタイプの基本的構造群よりなる。

$$NP + VP > \begin{cases} NP + VI \text{ [Type 1]} \\ NP + VT + NP \text{ [Type 2]} \\ NP + VB + \text{Complement} \text{ [Type 3]} \\ NP + VC + NP + \text{Complement} \text{ [Type 4]} \\ NP + VD + PNP \text{ [Type 5]} \end{cases}$$

五つのタイプは、さらに、下位分類される。

[Type 1]

$$NP + VI > \begin{cases} N + {}_1VI \\ ES + {}_2VI \end{cases} \text{ ⁽⁶⁾}$$

① Oct. 1, Nov. 12, 19, 26, Dec. 3, 10. (1967)

② Ohmann, R., "Generative Grammars", *Word*, 20 (1964), No. 3, 423—39.

③ ここでいう「変形」は Chomsky の *Aspects* の「変形」よりも Harris の「変形」に近いものである。

④ 詳しくは拙稿「英語の深層構造」参照。大阪外国語大学学報18号。

⑤ $A > B = A$ は B を含む。

$A + B = A$ と B とは相互依存。

$(A) = A$ は随意的(optional)項目。

$C \cdot S$ = connector + S. いわゆる sentence conjoining.

その他の記号については④を参照。

⑥ ES = embedder + S. いわゆる sentence embedding.

[Type 2]

$$NP+VT+NP > \begin{cases} N+{}_1VT+N \\ N+{}_2VT+ES \\ ES+{}_3VT+N \\ ES+{}_4VT+ES \\ N+{}_1Vmid+N \\ ES+{}_2Vmid+N \end{cases}$$

[Type 3]

$$NP+VB+Complement > \begin{cases} N+be+Complement \\ ES+be+Complement \\ N+VB+Complement \\ ES+VB+Complement \end{cases}$$

[Type 4]

$$NP+VC+NP+Complement > \begin{cases} N+{}_1VC+N+Complement \\ N+{}_2VC+ES+Complement \\ ES+{}_3VC+N+Complement \end{cases}$$

[Type 5]

$$NP+VD+P \quad NP > \begin{cases} N+{}_1VD+PN \\ N+{}_2VD+P \quad ES \end{cases}$$

これらの式の右辺はさらに下位分類されるのであるが、ここでは省略する。

与えられた資料をどのように分析するかを具体例を用いて、説明してみよう。

(1) The wind was still blowing hard and he went to the open windows to check the weather. (*River*, P.130)

$$\begin{array}{c} \text{(分析例(1))} \quad N+VI \text{ [Cand]}^{(1)} N+VI \text{ [Sto]}^{(1)} \\ \parallel \\ N+VT+N \end{array}$$

(2) He knew how boring any man's war is to any other man, and he stopped talking about it. (*River*, P.20)

$$\begin{array}{c} \text{(分析例(2))} \quad N+VT+[EhowS]^{(2)}+[Cand]N+VT+[Sing] \\ \parallel \qquad \qquad \qquad \parallel \\ N+be+A \qquad \qquad N+VD+PN \end{array}$$

(3) The gold rush that has developed since sterling's devaluation represents a dangerous new challenge to the dollar…… (The NYT, Nov. 26, 1967)

$$\begin{array}{c} \text{(分析例(3))} \quad N \text{ [RthatS]}^{(3)}+VT+N \\ \parallel \\ N+VI \end{array}$$

① Candはconnector *and* による sentence conjoining. Sto はN+VT+Nをto-infinitive に変形。

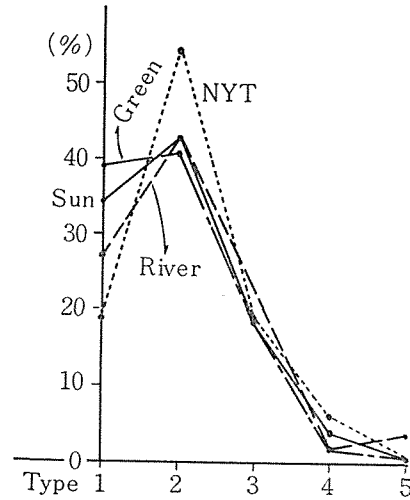
② embedder *how* による sentence embedding.

③ relator *that* による sentence conjoining.

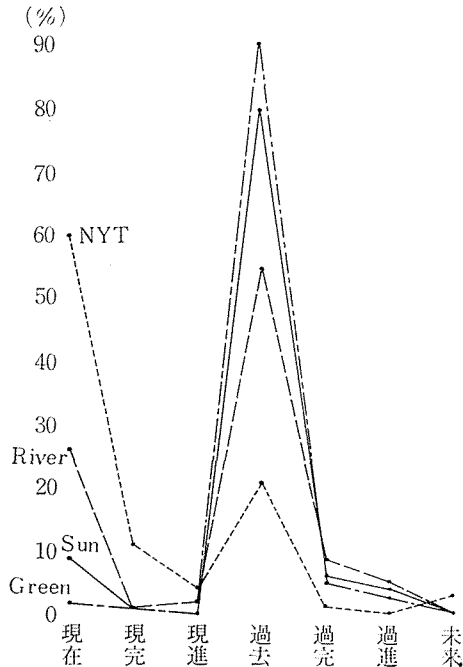
3.3 資料の分析結果

(1) 基本的構造群の分布

	Sun	Green	River	NYT
独立文の数 ⁽¹⁾	182	123	129	114
文の総数 ⁽²⁾	478	523	374	318
Type 1	34.3 (164)	38.8 (203)	27.3 (102)	19.2 (61)
Type 2	43.1 (206)	40.7 (21.3)	43.3 (162)	54.4 (173)
Type 3	18.2 (87)	18.3 (96)	23.3 (87)	18.9 (60)
Type 4	3.8 (18)	1.7 (9)	1.9 (7)	6.3 (20)
Type 5	0.6 (3)	0.4 (2)	4.3 (16)	1.2 (4)



(2) 動詞の tense の分布

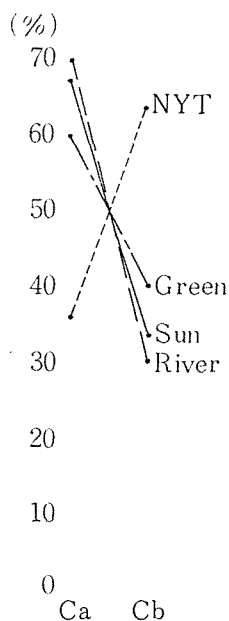


	Sun	Green	River	NYT
現在	9.4 (36)	1.6 (6)	26.4 (85)	60.48 (144)
現在完了	0.3 (1)	0.3 (1)	1.9 (6)	10.9 (26)
現在進行	0 (0)	0 (0)	2.2 (7)	3.8 (9)
過去	80.3 (309)	90.5 (348)	54.6 (176)	21.4 (51)
過去完了	6.2 (24)	5.2 (20)	9.0 (29)	1.3 (3)
過去進行	3.9 (15)	3.1 (12)	5.3 (17)	0 (0)
未来	0 (0)	0 (0)	1.2 (4)	2.9 (7)

- ① 大文字からはじまりピリオドでおわる文。
 ② embedded S や conjoined S など文として勘定する。
 ③ カッコの外にある数字は百分比(%). カッコ内は出現した実数。

(3) 文連結変形 (sentence conjoining) の連結詞 (connector) の分布

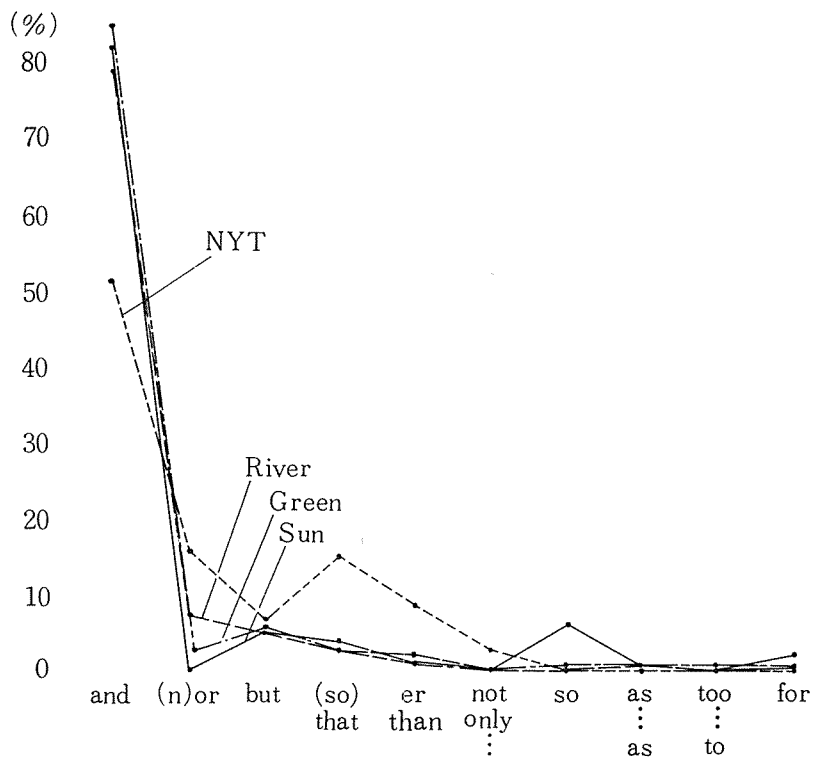
	Sun	Green	River	NYT
S_1CaS_2 ⁽¹⁾	67 (134)	59.2 (148)	70.6 (107)	36.3 (33)
S_1CbS_2 ⁽¹⁾	33 (62)	40.8 (109)	29.4 (44)	63.7 (54)



(4) Caの下位分類の分布

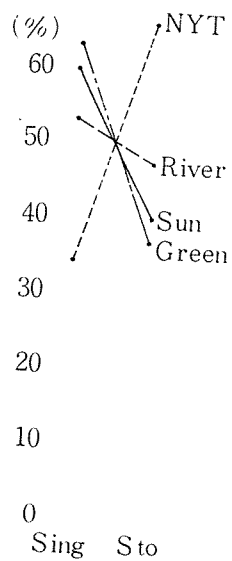
Ca	Sun	Green	River	NYT
and	84.0 (112)	83.0 (122)	79.1 (85)	51.5 (17)
(n)or	0 (0)	2.7 (4)	7.4 (8)	15.1 (5)
but	5.3 (7)	6.1 (9)	4.7 (5)	6.1 (2)
(so)that	3.8 (5)	2.7 (4)	2.8 (3)	15.1 (5)
-er than	0.8 (1)	2.0 (3)	1.9 (2)	9.1 (3)
not only ...but also	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3.0 (1)
so	6.0 (8)	1.4 (2)	0.9 (1)	0 (0)
as...as	0.8 (1)	1.4 (2)	0.9 (1)	0 (0)
too...to	0 (0)	1.4 (2)	0 (0)	0 (0)
for	0 (0)	0 (0)	1.9 (2)	0 (0)

① Ca: S_1CaS_2 の連結は可能であるが, $CaS_2.S_1$ という連結は不可能であるような connector.
Cb: S_1CbS_2 , $CbS_2.S_1$ とともに可能な connector.



(5) Sing と Sto による文連結変形の分布

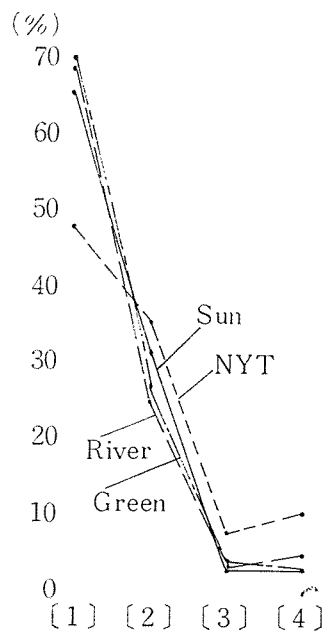
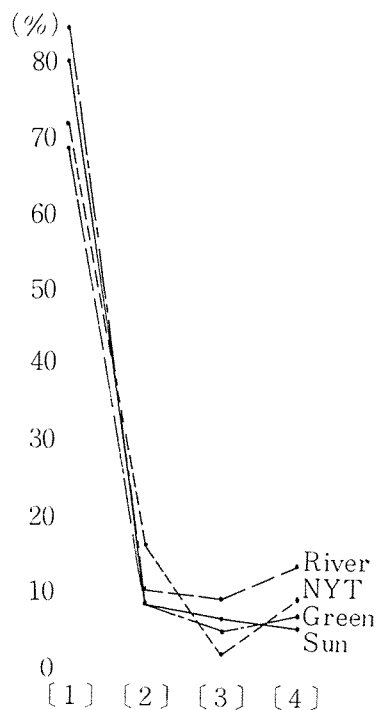
	Sun	Green	River	NYT
Sing	60.0 (50)	63.2 (81)	53.0 (26)	34.4 (28)
Sto	40.0 (33)	36.8 (48)	47.0 (23)	65.6 (53)



(6) N+VI の下位分類構造の分布

d は definiteness, -d は indefiniteness をあらわす。

	Sun	Green	River	NYT
[1] N ^d + VI	79.8 (133)	83.5 (167)	68.6 (70)	72.0 (45)
[2] N ^{-d} + VI	7.8 (13)	8.5 (17)	9.8 (10)	16.0 (10)
[3] N ^d + be	6.0 (10)	5.0 (10)	8.8 (9)	1.6 (1)
[4] N ^{-d} + be	4.8 (8)	6.5 (13)	12.7 (13)	8.0 (5)

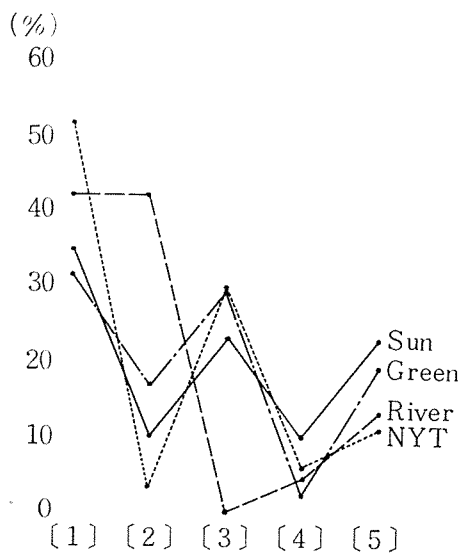
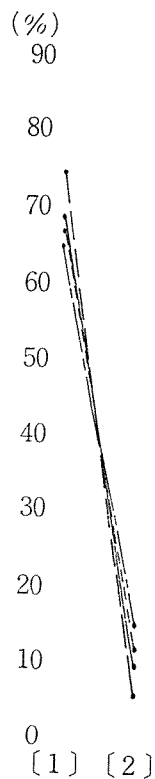


(7) N+VT+Nの下位分類構造の分布

	Sun	Green	River	NYT
[1] N ^d + V _t + N ^d	65.1 (93)	69.7 (101)	68.5 (89)	48.2 (61)
[2] N ^d + V _t + N ^{-d}	30.8 (44)	26.2 (38)	24.6 (32)	34.8 (44)
[3] N ^{-d} + V _t + N ^d	2.1 (3)	2.8 (4)	3.1 (4)	7.1 (9)
[4] N ^{-d} + V _t + N ^{-d}	2.1 (3)	2.1 (3)	3.9 (5)	9.5 (12)

(8) N+VT+NP の下位分類構造の分布

	Sun	Green	River	NYT
[1] N+VT+N	78.5 (146)	75.8 (147)	84.6 (132)	77.6 (128)
[2] N+VT+ES	21.5 (40)	24.2 (47)	15.4 (24)	22.4 (37)



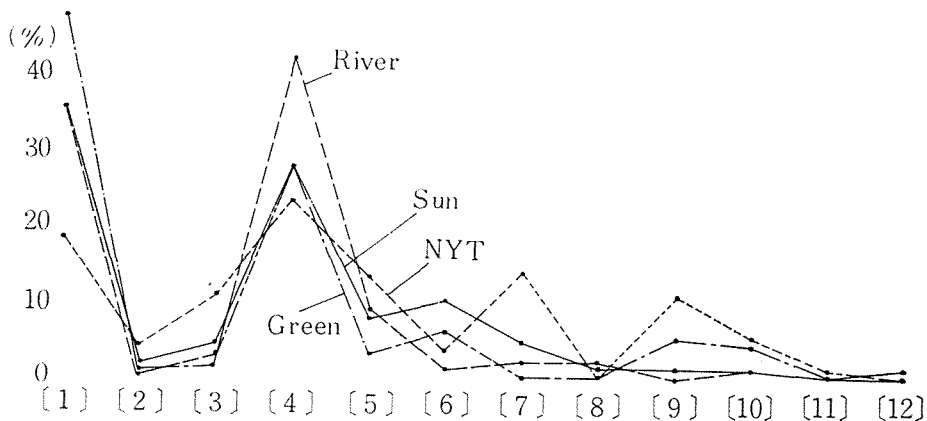
(9) N+VT+ESの下位分類構造の分布

	Sun	Green	River	NYT
[1] N+VT+thatS	35 (14)	31.5 (15)	42 (10)	51.3 (19)
[2] N+VT+conS*	10 (4)	16.8 (8)	42 (10)	2.7 (1)
[3] N+VT+Sto	22.5 (9)	29.4 (14)	0 (0)	29.7 (11)
[4] N+VT+Sing	10 (4)	2.1 (1)	4.2 (1)	5.4 (2)
[5] その他	22.5 (9)	18.9 (9)	12.6 (3)	10.8 (4)

* when, how, whether, if, etc.

(10) NP+VB+Complement の下位分類構造の分布

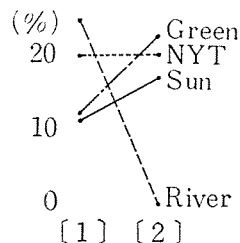
	Sun	Green	River	NYT
[1] N+be+A	35.2 (32)	48 (48)	32.2 (32)	18.7 (11)
[2] N+be+A+PN	2.2 (2)	0 (0)	1.1 (1)	3.4 (2)
[3] N+be+A+ES	4.4 (4)	3 (3)	2.2 (2)	10.2 (6)
[4] N+be+N	27.5 (25)	27 (27)	41.8 (38)	23.8 (14)
[5] N+be+PN	7.7 (7)	3 (3)	8.8 (8)	11.9 (7)
[6] N+be+Ad	9.9 (9)	6 (6)	1.1 (1)	3.4 (2)
[7] N+be+ES	4.4 (4)	0 (0)	2.2 (2)	13.6 (8)
[8] N+be+N+A	1.1 (1)	0 (0)	2.2 (2)	0 (0)
[9] ES+be+A	1.1 (1)	5 (5)	0 (0)	10.2 (6)
[10] ES+be+N	1.1 (1)	4 (4)	1.1 (1)	5.1 (3)
[11] ES+be+Ad	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.7 (1)
[12] ES+be+PN	1.1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)



(II) 能動構造に対する受動構造の割合 (%)

	Sun	Green	River	NYT
[1] N+VT+N	10.9	11.6	24.2	19.5
[2] N+VC+N +Comp*	16.7	22.2	0	20.0

* Comp=Complement



4. あとがき

われわれは、文体を言語表現形式の選択パターンと考え、個人文体の中にどのようなパターンが発見できるかをしらべてきた。この小論は予備的な考察であるので調査資料を限定したのであるが、将来は、もっと大きな資料にあたり、ここで発見したようなパターンがやはり有効に存在しているかどうかを検討してみる必要がある。結論的にいえば、われわれの方法論はかならずしも的はずれなものではないといえると思う。資料の分析結果を検討してみて痛感したのは、統計的処理の必要であった。たとえば、資料Aと資料BとがCという差を生じた場合、われわれは、このCが統計的に有意味 (significant) であるか、無意味であるかをたずねてみなければならない。もし有意味ならAとBとは区別され、そうでないならAとBとは同一と判定される。このような統計的処理は本論ではすべて省いてあるが、本格的に資料の分析をおこなうときには考慮しなければならない。

(1968年1月31日)

BIBLIOGRAPHY

- Bloomfield, L., *Language*, New York: Henry Holt & Co., 1933.
- Chomsky, N., *Aspects of the Theory of Syntax*, The M.I.T. press, 1965.
- Chomsky, N. & Miller, G.A., "Introduction to the Formal analysis of Natural Languages" *Handbook of Mathematical Psychology II*, 267—321.
- Enkvist, N. E., "On Defining Style" *Linguistics and Style*, Oxford Univ. Press, 1965.
- Guiraud, P., 「文体論」 (佐藤信夫訳), 白水社, 1967.
- Harris, Z.S., *Structural Linguistics*, Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1960.
- 波多野完治, 「文章心理学<新稿>」, 大日本図書, 1965.
- *文体の心理学, 「文体論入門」 22—47.
- Herdan, G., *The Advanced Theory of Language as Choice and Chance*, Berlin & New York:

- Springer-Verlag, 1966.
- Herdan, G., *Language as Choice and Chance*, Groningen: Noordhoff, 1956.
- 東田千秋, 「文体論—英国近代作家の文体」研究社, 1959.
- Hockett, C.F., *A Course in Modern Linguistics*, New York: The MacMillan Co., 1962.
- Jespersen, O., *Language*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1959.
- Joos, M., *The Five Clocks*, The Hague: Mouton & Co., 1962.
- “The Isolation of Styles”, *Monograph Series* 12 (1959) 107—113.
- Kenyon, J.S., “Cultural Levels and Functional Varieties of English”, *Readings in Applied English Linguistics*, 294—301.
- こばやし ひでお, 「言語美学としての文体論」, 「文体論入門」3-21.
- Long, R.B., *The Sentence and its Parts, A Grammar of Contemporary English*, The Univ. of Chicago Press, 1961.
- Morris, C.W., *Foundations of the Theory of Signs*, The Univ. of Chicago Press, 1960.
- 日本文体論協会編, 「文体論入門」, 三省堂, 1966.
- 魚返善雄, 「言語と文体」紀伊国屋書店, 1965.
- Ohmann, R., “Generative Grammars and the Concept of Literary Style”, *Word*, 20 (1964), No. 3, 423—39.
- Osgood, C.E., “Some Effects of Motivation on style of Encoding”, *Style in Language*, 293—306.
- 『特集:パターン認識』「数理科学」1967年2月号, ダイヤモンド社.
- Pool, Ithiel de Sola (ed.), *Trends in Content Analysis*, Univ. of Illinois Press, 1959.
- Saporta, S. & Sebeok, T.A., “Linguistics and Content Analysis”, *Trends in Content Analysis*, 131—150.
- Sebeok, T.A., *Style in Language*, The M.I.T., 1960.
- Spencer, J. & Gregory, M.J., “An Approach to the Study of Style”, *Linguistics and Style*, 1965.
- Spitzer, L., *Linguistics and Literary History: Essays in Stylistics*, New York: Russel & Russel, 1962.
- Svartvik, J., *On Voice in the English Verb*, The Hague: Mouton & Co., 1966.
- Voegelin, C.F., “Casual and Noncausal Utterances within Unified Structure”, *Style in Language*, 57—68.
- Warner, A., *A Short Guide to English Style*, London: Oxford Univ. Press, 1962.
- Whitehall, H., *Structural Essentials of English*, New York: Harcourt, Brace, 1956.
- 安本美典, 「文章心理学の新領域—文学作品の科学的理解はいかになされるか」, 誠信書房, 1966.
- 「文章心理学入門」, 誠信書房, 1965.

DATA

- Hemingway, E., *The Sun Also Rises*, New York: Charles Scribner's Sons, 1954.
- Green Hills of Africa*, Penguin Books, 1966.
- Across the River and into the Trees*, Penguin Books, 1966.
- The New York Times*, editorials, Oct. 1, Nov. 12, 19, 26, Dec. 3, 10 (1967).